

著：岡田正人

レジデントのためのアレルギー疾患診療マニュアル

書評者：森本佳和(コロラド大アシスタントプロフェッサー・アレルギー科)

本書の著者である岡田氏はニューヨークで内科研修、Yale 大学でリウマチ・アレルギー臨床免疫科のフェローシップを修了され、米国の内科学・リウマチ学・アレルギー免疫学の3つの専門医をもっておられる。その後、フランスの大学関連病院にて8年間の臨床および医学教育の経験をもたれ、現在は聖路加国際病院に勤務しておられる。アレルギーは、日本・米国・ヨーロッパで大きな違いのみられる医療分野の1つである。アレルギーに対する減感作療法ひとつを比較しても、あまり一般的に行われない日本、皮下投与による減感作療法を中心とする米国、舌下投与による減感作療法を積極的に取り入れるヨーロッパ、という具合である。これら異なる医療地域をトップレベルの医療機関で実際に臨床医療を経験してこられた岡田氏を書かれた書物であり、その価値は高い。

さて、本書を手にし、ページをめくると、そのギッチリと詰め込まれた内容に手に汗をかく思いさえする。内容は新しく、多くのエビデンスをもとに著者である岡田氏の経験や知識に触れることができる。米国におけるアレルギー免疫学の専門臨床トレーニング(フェローシップ)は最低2年間であり、筆者自身その教職にあるが、本書にある内容を身につけて実践できれば、アレルギー疾患に関してはそれで十分ではないかとさえ

感じさせられる。

アレルギー疾患はその病因においてアトピー性素因という共通点があり、例えば鼻炎、アトピー性皮膚炎、喘息、食物アレルギーの疾患が一人の患者に合併することは頻繁にある。日本においてこれら疾患の専門的治療を受けるとなると、耳鼻咽喉科・皮膚科・呼吸器内科・小児科などと多くの科にわたることになる。患者側にとっても問題であるが、医療を行う側にとっても良質で包括的なアレルギー疾患のトレーニングを受けることが難しい状況にある。

このような背景があるため、例えばプライマリケアレベルでアトピー性皮膚炎、蕁麻疹、鼻炎、喘息、食物アレルギーといった疾患に対して、標準的で質の高い治療が広く行われているかどうかははっきりしない。これらアレルギー疾患については、同僚や先輩医師からの教え、あるいはどこかで仕入れた知識をもとに、慣習的医療が行われているのが一般的かもしれない。また、日本でアレルギー疾患の診療についての実践的な書物は限られている。かといって、海外由来のエビデンスを日常診療に取り入れるにはさまざまな問題に直面する。使用される薬剤も異なるうえに、文化もスタディされる患者も異なる。海外からの書物あるいは翻訳書を読むことはできても、そこに記されている内容を日常診療に応用できるかどうかは

別問題である。本書は海外・国内のエビデンスをもとに、岡田氏自身の類まれなる経験に基づく解釈によって、臨床的にすぐに応用できる情報が詰め込まれている。日本でのアレルギー疾患の診療に即応用できる実践的な書物である。

さらに本書の章末ごとにある「臨床医のための免疫学」Over Simplified は圧巻である。「自然免疫と適応免疫(獲得免疫)―お巡りさんと刑事さん」では toll-like receptor (TLR) とアレルギー疾患の関連、「細かいことは気にしないスーパー抗原」ではスーパー抗原とアトピー性皮膚炎の関連性など、近年よく話題にされるアレルギー領域での免疫学の知識がわかりやすく述べられている。近年の進歩によって、基礎医学の知識が臨床医学に応用されるということが多くなり、基礎的な免疫学の知識はますます重要性を帯びてきており、それをこのように楽しく学べることは大変嬉しいことである。

タイトルは控えめに「レジデントのための…」とあるが、上級医や指導医、アレルギー疾患を専門とされる医師にこそ読んでいただきたい名著である。

● A5 頁392 2006年
定価 4,410 円
(本体 4,200 円 + 税 5%)
[ISBN 978-4-260-00145-8]
医学書院刊